

金沢八景地区

金沢区

風光明媚な景観と文化的史跡の宝庫
豊かなアメニティ資源を次代につなぐ

港町横浜のルーツとなる エリア

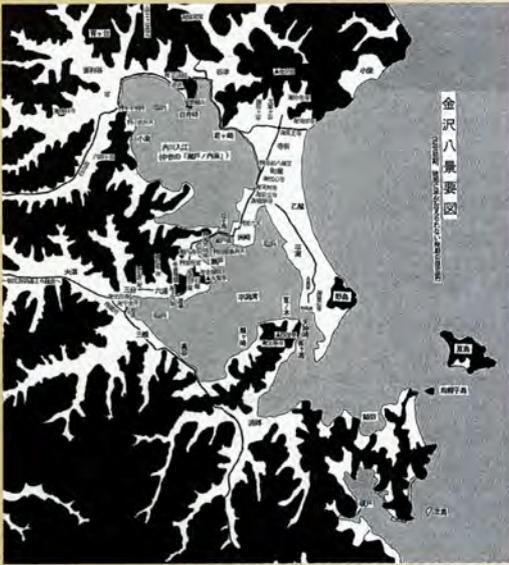
「みなと横浜」のイメージが定着したのは、幕末の横浜開港に負うところが大きい。

い。しかし、横浜の港町としての歴史は、中世、金沢北条氏の「六浦津」開港に始まっている。

13世紀、金沢北条氏は、朝比奈時を切り拓くことで鎌倉と金沢を結ぶと共に、六浦の入り江（現在の平潟湾）に港を整備した。そしてこの港を拠点に房総半島や関東平野のみならず、全国、さらには中国大陸や朝鮮半島と交易を重ねた。横浜港が近代日本の玄関口であったように、「六浦津」は中世日本の経済と文化の玄関口だったのである。

そんな「六浦津」一帯が「金沢八景」と呼ばれ

●埋め立て以前の平潟湾の原地形
（『金沢八景』県立金沢文庫より転載）



Area Data

●金沢八景地区（京急金沢八景・金沢文庫駅周辺）

地勢 金沢区は市の南端に位置し、埋め立て地からなる東部の臨海地域、起伏のある丘陵地域と谷戸に分けられる。内陸部西部には横浜市最大の緑地帯（円山山緑地）があり、臨海部は横浜市で唯一の自然海岸（野島海岸）を含む海岸線。ここで取り上げる金沢八景地区とは、北は金利谷から谷津、金沢、小柴、南は六浦、瀬戸、瀬ヶ崎、室の木あたりまで、すなわち平潟湾がまだ

埋め立てられる以前、瀬戸の海峡でひょうたん型にくびれていた頃の湾内とその湾岸エリア一帯を指す。

歴史 中世、鎌倉幕府が現在の平潟湾に「六浦津」を築いたことから、一帯は経済・貿易拠点として発展。江戸中期からは平潟湾の入り海が徐々に埋め立てられ、現在の金沢八景地区の核となる市街地が形成された。



●武陽金沢八景略図（『六浦・金沢』県立金沢文庫より転載）

るようになったのは、江戸時代。徳川家康も魅せられたという二重に入り組んだ平潟湾の美しい景観が、江戸城のふすま絵に描かれたのをきっかけに、それを見た大名たちが参勤交代の際に立ち寄るようになったことから、金沢八景地区は江戸近郊の観光名所となる。また、江戸時

代中期から平潟湾の内湾（内川入江）で新田開発が始まり、泥亀町など現在の金沢八景地区市街地の基盤が形成された。ただし、内湾の埋め立てによって観光地としての金沢八景の景観的価値は半減する。その後、伊藤博文が野島に別荘を構えるなど、明治・大正期には風光明媚な観

● 称名寺芸術祭



● 金沢区の「一番魅力的なところ」(複数回答)



ことのできる海や緑、歴史的資産といったアメニティ資源が八景地区の住民や金沢区民全体の暮らしやすさに貢献する度合いは高い。

たとえば、平成12年度に実施した市民生活行動調査で、金沢区民の居住環境の質問項目別の満足度をみても、「緑や自然の豊かさ」は都筑区、栄区に次いで3位(55・9%)、「まちなみなど景観の良さ」も青葉区、都

歴史と自然をテーマにした
市民活動の百貨店

この10年間で、金沢八景の自然環境や

光地の伝統は避暑地・別荘地として引き継がれた。しかし、戦前、金沢八景地区は大きく変わる。軍港・横須賀の影響により、金沢八景周辺に当時の最新技術を持った軍需工場や軍事施設が急速に集積するようになり、金沢八景地区には技術者や工員など多くの人々が移り住んできた。地区の人口は一気に増加し、寺前・町屋・洲崎などの市街地の原形がこの時期に形成された。ただし、その一方では、野島地先の砂州が埋め立てられ、瀬ヶ崎・室の木の丘陵が切り崩された。

第二次世界大戦をはさみ、今一度、地区が大きく変わったのは昭和40年代から60年代にかけてである。住宅地開発が急

速に進み、称名寺の裏山・金沢山は、ぎりぎりまで削られた。また、金沢地先の埋立事業により、かつて首都圏屈指の海水浴場であった乙艦海岸は人工海浜「海の公園」となり、水族館のあるテーマパーク・八景島が造成された。

金沢の海と緑のアメニティ資源と暮らしやすさ

金沢八景地区に住むことの魅力は、「海を身近に感じられる」ことだ。江戸時代後期以来の埋め立て開発によって、平潟湾はずいぶん狭くなり、海岸線の地形も変わってしまった。それでも金沢八景は、横浜で唯一、東京湾の「湊(みなと)ま

ち」の原風景を感じることでできる場所である。今でも、春は潮干狩り、秋はハゼ釣り、江戸前の海ならではの風物も誰もが気軽に体験できる。

金沢八景地区の多くの住民もそう考えている。平成12年度に金沢区が区民に対して実施した意識調査の結果をみても、「金沢区が一番魅力的なところは」という質問に対して、「海を身近に感じられる環境(48・6%)がトップであり、次いで、「緑豊かな環境(14・5%)、生活に便利(10・4%)、「歴史的・文化的資産が豊富(10・2%)と続いている。これを金沢八景地区の住民だけで集計すれば、「海を身近に感じられる環境」は63・2%に跳ね上がる。

こうした身近に触れる

筑区に次いで3位(26・6%)、「公園などオープンスペースの豊かさ」は都筑区に次いで2位(34・2%)である。

自然環境やアメニティでは、18区の中でいずれも満足度が上位である。ただし、金沢八景地区の場合、このようなアメニティ資源(海や緑のオープンスペース)が、金沢文庫駅や金沢八景駅、国道16号など交通の利便性が高い場所に隣接して存在しているため、公園や社寺林でもない限り、絶えず開発の危機にさらされている。

そのためこの地区では、高度経済成長期から昭和60年代にかけて、称名寺裏山の宅地開発や平潟湾の埋め立て、上行寺遺跡のマンション開発などを巡る住民の反対運動も繰り返された。

別の見方をすれば、江戸後期から明治、大正、昭和と緑を削り、海を埋め立てることで新しい産業を興し、新しい住民を受け入れ続けてきたわけであり、そのことがこのエリアの経済と社会を活性化してきたことは間違いない。

いずれにしろ、歴史的にも価値のある海と緑のアメニティ資源が、この地区の住民にとって、将来にわたって維持活用すべき共有の財産であることが理解できる。

歴史をテーマにした市民活動の方向性は大きく変わってきている。開発反対を叫び、保全もしくは開発されたたん潮が引くようにその場所から去っていくというスタイルではなく、金沢八景の今ある環境の空間的な魅力を発掘し、その場所に持続的に自らが楽しみながらかわり続けることで、広く多様に仲間を増やしていくというスタイルだ。

その一つ、横濱金澤シティガイド協会

は、住民にまち歩きや史跡巡りを通して金沢区の歴史や資源を知ってもらい、一緒にまちづくりのあり方を考えようと呼びかけるグループである。定期的に研修会やまち歩きのイベントを開催しているほか、個人やグループのガイド依頼にも応じる。また、称名寺での休日ガイドなども行っている。

「金沢水の日」実行委員会は、横浜市唯一の500メートルにおよぶ自然海岸を

持つ野島公園を舞台に活動する団体。同委員会は市民団体の連合体で、区内の海や川、また森までを含めた地域の豊かな水環境を再認識し、次世代に健康な姿で引き継いでもらうことを目的に設けられ、海浜清掃や、海水を使つての塩づくり、生き物観察など、手づくりのイベントを開催してきた。このほか、称名寺一帯の緑と歴史空間を使って、称名寺周辺に住む芸術家や商業者、住民が芸術家や子ども

もたちと一体となつて作品の展示・販売・発表会を行う「称名寺芸芸祭」なども生まれている。

横濱金澤シティガイド協会の会長は言う。「歴史や自然を守れと口だけで言つても、それだけでは守れない。自分自身で何度も金沢を歩き、皆の意見を聞いて具体的に自分の体を動かさないと何も始まらない」。これは今の金沢八景地区のまちづくりに関わる人の共通の思いだろう。

子どもたちに伝える金沢八景の魅力 —金沢八景クラブ

平成13年9月29日、平潟湾に向かつて突堤のように伸びる琵琶島神社沿道に300個の行灯が吊るされた。制作したのは、地元の小中学生たち。使用済みの牛乳パックでつくつた行灯に思い思いの絵を描いた。夕方、ほのかにライトアップされる中、行灯に火がともされると、子どもたちの大きな歓声が上がった。

「瀬戸の秋月お月見復活祭」と名づけたこのイベントを企画したのは、「金沢八景クラブ」。メンバーの中心は、横浜市立大や関東学院大、横浜国大などの学生だ。金沢八景地区の資源の一つに、横浜市立大や関東学院大など地区内に大学が立地していることがあげられる。これら大学の学

生たちが、地域のコミュニティ活動においても大きな活力になっている。金沢八景クラブも、「地域に野球やサッカークラブはあるが、まちづくりに関するクラブがない。子どもの頃から地域の自然や文化に関心を持つてもらえば、将来のまちづくりにつながるのでは」という学生の思いから誕生した。

同クラブが設立されたのは平成12年だが、すでにさまざまな活動を展開している。昨年は、地区内の小学校などに協力を呼びかけ、「瀬戸の秋月お月見祭」や「平潟湾はせ釣り大会」など金沢八景の魅力を伝えるイベントを開催。また横浜立大学の学園祭で「金沢八景クラブ」の発表会を催し、

子どもたちに金沢八景地区にちなんだ環境学習成果を発表してもらつたり、地域伝統芸能の公演を行った。

ただ、昨年の活動からは反省も生まれた。「イベントに参加してもらつただけでは、子どもたちはお客さんに過ぎない。子どもたち自身が主体的に参加するような企画にしなければならぬ」「イベントの企画にまけすぎて、子どもたちと直接向き合っていないのではないのか」と。

そうした反省から、今年はず「子ども通学路・居場所調査」を実施。学校の協力を得て、子どもたちと直接コミュニケーションをとりながら、まちのどこに子どもたちの「居心地のよい場所」があるのかを調査した。その結果、地区の子どもたちの多くが外で遊んでいることや、公園よりも路地にこそ子どもたちの遊び場があることなどを発見した。

この調査結果にもとづき、今年はいベ

トを開催するときも、「子どもたちの居場所をつくる」ことを基本方針に掲げ、企画段階から子どもたちが関われるような方法を模索している。

大学生や地域の人々の発想をもとに学校が協力し、将来の地域を担う人材を育てていく。その結果、育っていくのは子どもたちだけではない。大人たちも、大学生も、地域を支える人間として育っていくにちがいない。

●金沢八景クラブ・瀬戸の秋月お月見復活祭

